「まさかそんなことが…。」
厚生労働省のキャリアが叫んだが、思いはみな同じだった。
「何か具体的な証拠でもあるのですか。」
「今の所お話したことが事実としてあるだけです。原因や因果関係をひとつひとつ証明するとなると、まだかなり時間がかかります。」
プレゼンテーションにあたった老教授は、ことさら事実ということばを強調して答えた。
「もうすでに二十年近くたっている。今さら原因がわからないので何も動けないといういい方では済まされない。何か早急に手を打たなければならない所にまで来ているということを、まず、十分にご理解いただきたい。」
委員会を開催した官房長官が釘を刺した。
「今、流通している物には、問題があるのですか、ないのですか。」
経済産業省の太った次官が眼鏡を拭きながら詰問するようにいう。
「それも、今後の結果次第で、どうなるとは申し上げられません。ただ、今は、流通している物に関連付けられるだけのデータが無いということです。」
矢面に立たされそうになったので、老教授は少し焦った。
「ならば、経済産業省として出来ることはありませんな。」
「しかし、住民訴訟が起こった場合、監督省庁として経済産業省の責任が追求されることは、まず間違いありません。」
「そんなことは、いわれなくてもわかってるよ。」
法務省に指摘されると、経済産業省は憮然となった。
「しかし、これは国民の健康の問題だろう。なんで厚生省が黙っているんだ。」
「いや、しかし、このケースは伝染病や食中毒とは違いまして…。」
上司の代理で出席した厚生省の若造は見るからに格下で、最初から他の省庁のメンバーには押され気味だった。
「エイズの時は、危険をわかっていていながら見過ごしたんだろう。この話とどう違うんだ。」
「で、ですから、今回はさらに発症との因果関係が薄く、だれにも原因と結果を結び付けられないということで…。」
「過去の公害訴訟と同じように、もっと患者が出て逃げられなくなるまで待つというのか。」
「でも、しかし、それじゃ、役所は動けないんです。」

「あんた、誰に向かっていっているのかわかっているんだろうね。」
経済産業省は残酷な笑みを浮かべていった。自分と同じスケープゴートを他に作って、まずは安心したらしい。
「電波管理は郵政の仕事だろう。」
総務省の代表がぎくりとしたのがわかった。
「たしかに高周波数帯を開放したのは、旧郵政省の仕事ですが、電波管理行政が郵政省の管轄として人間の健康まで含むというのは、いかがなものかと。もちろん人の健康に害があってはならないのですが、あくまで通信の一環として電波管理行政はあるわけで、そのために健康のモニターが必要ならば、それは厚生省の仕事で、前回もその辺の所は厚生省に諮問が出ているわけでして…。」
「し、しかし、今日の話では特定できないながらも電波が原因ということなんでしょう。電波が人の健康に影響することが前提なら、今も電波は出ているわけで、郵政さんだって逃げられないでしょう。」
「そうだよ。どうせ民間に移管されるかもしれないんだから、過去の事実は事実として、郵政さんで始末したらどうだい。どうせ最後は金の話だろう。郵政さんなら資金に困ることもないだろう。」
次の犠牲を見つけて経済産業省も後押しをする。総務省は青くなった。
「そんなこと勝手に決めないで下さい。民営化の話だってこれからだ。まだ決まった訳ではないんです。」
「じゃ、これまでのところを総括しようか。」
落しどころを捕らえたらしく経済産業省に余裕が出てきた。さすがにリコール問題には慣れているため、今日の会議では終始他の省庁をリードしていた。

そもそもの事の起こりは、頻発する青少年の激情犯罪にあった。普通のいわゆる不良グループとは違い、少年達のことばを使えば、『すぐにマジ切れする』若年犯罪者層には、一定の心理的傾向が見られた。首相の諮問機関からその調査を命ぜられ、今回の報告をまとめたのが、精神医学と社会心理学の権威者で構成された老教授のグループであった。

報告がユニークである所は、電子工学にまで踏み込んで、電波が人間の思考に与える影響を遺伝学的に捉えた点にある。それは最近の心理学が遺伝的記憶を大幅に認めたことにも関連していた。いわゆるマジ切れ犯罪者の多くは、１９８０年代初期に生まれている。これが郵政省の携帯電話への高周波数帯解放と時を同じくしていた。

「これまで、電波が胎児に与える影響を体系的に調べた例はありませんが、まず携帯電話の第一世代がアナログで高出力であったことを思い出していただきたい。それまでは、車載通信機程度の物しか普及していなかった所に、携帯電話が一挙になだれ込みました。当時の胎児はさぞうるさかっただろうと思います。」

「なぜ影響を受けた年齢層を80年代の前半出生の者に限るのか。」

「それは、その後の携帯電話がデジタルに移行したためです。ですから、初期携帯に使われた電波を妊娠したネズミに当て続けた場合のみ、生まれた仔ネズミの攻撃性がある条件下で異常にに高まるというデータになる訳です。」

「しかし、実験はネズミで再現しただけだろう。」

「例えば、送電線が周辺住民の健康に影響を与えるということは、アメリカでは判例をふまえて公知の事実となっております。したがって固体の実験としては、今回の実験が胎児にも与えうるという所だけで十分です。さらにこの図を見ていただきたい。人間の場合でも８０年代前半に生まれた激情犯罪の犯人の出生地と問題の携帯電話の普及台数を地域別にプロットすると、このような相関が見られます。」

図には、各県別に携帯電話の普及台数が青い色の濃さとなって表わされ、その上に犯人の出生地が赤い点でプロットされていた。それは、大阪、岡山から広島、山口と続き福岡まで伸びている。

「このように瀬戸内海の沿岸に沿う地域で一致した理由は、初期携帯の使用者がどのような層の人間であったかを考えるとわかります。当時高額であった移動電話をあえて使う必要にあった商売はなんでしょう。」

「…ヤクザだ。」

「そうです。当時、この地域には、極めて重大なヤクザの抗争問題が発生していました。ヤクザは、出始めた携帯電話をさっそく取り入れて使いました。それがこの現象を生んだ原因です。携帯が女子高校生にまで爆発的に普及するのは第二世代の低価格機からで…。」

「問題は、そのような激情犯罪症候群となりうる人間の数です。別の見方をするなら、この件の被害者となりうる人の数です。」

厚生省が周りを見まわしながらいった。出席者の大半がうなづいたので、厚生省は、ほっとしたように汗をぬぐった。

「私達の推定では、およそ四十万人です。」

「四十万か。少ないな。」

経済産業省がこともなげにいった。

「しかし、どうするんだ。今さら携帯を回収したって何にもならんし、人間を回収するわけにいかんぞ。」
「高周波帯はすでに他の機器まで使われており、今から制限すれば日本の通信インフラが根底から覆ります。総理も大臣もそれを望んではおりません。」
「電波の危険性を下手にリークしたら日本中がパニックになります！」

さすがに対策案は簡単に出て来なかった。かなり長い間沈黙が流れた後、そこに文部科学省の技官がおずおずと手を挙げた。
「要は、特定の因子を持った人間が、特定の周波数帯に過敏に反応するということで理解いたしました。もし、これが機械の話であるならば、電波を受ける側に周波数の変換装置をつければ簡単に解決します。」
「変換装置とはどんな物だ。」
「いわゆるジャマー用です。特定周波数に全部の電波を変換するわけではないので、マイクロチップが一個で足ります。ただ、問題はどうやって人間に取り付けるかです。」
農林水産省が手を上げた。
「チップの埋めこみでしたら、日本はまだですが、海外に実績があります。もっともペットや家畜の検疫用の話ですが。」
「どうするんだ。」
「薄い小さなフイルム状のチップなら、普通の注射のようなもので皮下に挿入できます。」
「気に入った。一番安く済みそうだ。もう国債は発行は出来ないからな。」
財務省が満足げにうなずく。
「し、しかし、国民に気づかれないようにそれを行うとなると……。」
「それは、厚生省で検討したまえ。予防注射は得意だろう。風疹でもBCGでもいいじゃないか。」
「では、チップの手配は、経済産業省。実施は、農水省のデータをもとに厚生省。資金は郵貯から政府が形を変えて借入し、金利だけ財務省に追加予算をお願いするということで、官房長官、いかがでしょうか？」
「よし、それで行こう。」
秘書官に揺り起こされて、官房長官が目をこすりながらいった。
かくして技術大国日本の優秀な官僚は、ITの重大局面を乗りきった。